

株式会社アーマリン近大の起業展望

村田 修

近年、理系分野においてモノづくりを得意とする大学の研究成果を中心としたベンチャー起業が活発化している。そのような中、企業としての最低資本金未満でも会社を興すことができる中小企業挑戦支援法が施行された2003年を機に、株式会社アーマリン近大が設立された。そして、その発足に当たっては長年にわたる近畿大学水産研究所が技術開発した多くの養殖魚類が基盤となった。ここでは、その軌跡について紹介する。

近畿大学水産研究所の歩み

戦後間もない1948年、近畿大学初代総長世耕弘一は「将来必ず食料資源が不足する時代に遭遇する、そのためには海を耕し、海産物を生産しなければならない」との理念を提唱して、近畿大学白浜臨海研究所（現水産研究所）を開設した。そして、2代目所長原田輝雄は1953年からブリの網生簀式養殖法を開発し¹⁾、産業規模での魚類養殖を初めて可能とした。この網生簀式養殖法は現在では世界中に普及しているが、当時は築堤式や網仕切り式といった効率の悪い養殖法しかなく、網生簀式養殖法の開発直後にブリ養殖は西日本各地に急速に普及し、1958年には農林水産統計に養殖ブリの生産量が記載されるに至った。近畿大学水産研究所の養殖産業への最初の重要な貢献といえる。さらに原田はマダイ、ヒラメなどをはじめとする有用な18種に及ぶ海水魚の増養殖の研究にも着手した。原田は網生簀式養殖法の開発段階で養殖していたブリを市場へ出荷しており、この大学で育

てた魚を出荷するという方針が近畿大学水産研究所の大きな特徴として現在まで60年間以上にわたって続いており、株式会社アーマリン近大の設立へと展開したといえる。

次いで近畿大学水産研究所では、養殖用に使用する幼魚（種苗）は天然資源に頼るのではなく人工種苗であるべきとの考えから、有用魚類の親魚育成と人工孵化・初期飼育の技術開発を進め、多くの魚種で種苗生産技術を確立してきた。さらには、養殖に適した魚類の品種改良にも積極的に取り組み、選抜育種による成長の早い品種、交雑による新品種などを作出してきた²⁾。そして、これらの魚を育てて研究し、研究費は育てた魚を売って自分たちで稼ぐことをモットーにした研究基盤をつくり上げてきた。実学精神を貫き、網生簀式養殖および種苗生産技術を結集した代表作は1970年から研究を開始し、2002年に完全養殖に成功したクロマグロ（近大マグロ）の産業化であろう³⁾。

現在は全国6か所に実験場、5か所に種苗センターがあり、教職員は197人（教員12人・技術員163人・事務員22人）で構成されている。

アーマリン近大の発足と経緯

これまで、近畿大学水産研究所は60年以上にわたる産学協同の研究や生産事業を行ってきた。また和歌山県白浜町および鹿児島県瀬戸内町の漁業協同組合と共同で養殖科学センターを設立して収益事業を手掛けてきた。

株式会社アーマリン近大

<会社概要>

設立 平成15年（2003年）2月19日
 代表 達 浩康
 資本金 5,250万円（2013年2月現在）
 従業員数 20名（2015年4月現在）
 事業内容 クロマグロ、マダイ、シマアジ、ブリ、カンパチ、トラフグなどの養殖用種苗、および20種以上の成魚、加工品の販売
 U R L <http://www.a-marine.co.jp/index.html>
 本 社 和歌山県西牟婁郡白浜町1番地5

<企業理念>

60年を超える歴史をもつ近畿大学水産研究所が、独自の水産養殖技術により、卵から成魚まで一環した管理体制と、低密度飼育で魚へのストレスの軽減を優先させた環境により育てられた優良な魚を、「安全」で「安心」さらに「美味しさの探求」にこだわった魚として広く消費者に販売することを目的に設立する。

しかし大学なので、事業としてなかなか認知されず、また総合大学の大きな枠組みの中での事業では、民間企業のようにスピーディーで思い切った販売・営業活動ができなかった。そのような中、2003年に新事業創出促進法の一部改正に伴って、資本金1円から会社がつくれる最低資本金規制の特例による「中小企業挑戦支援法」が施行された。同年2月19日に同研究所の販売・営業部門を担当する新会社「株式会社アーマリン近大」は、その認可を受け、和歌山県法務局田辺市局第1号として設立され、資本金5万円でスタートした。

「株式会社アーマリン近大」は、近畿大学水産研究所が独自の水産養殖技術により、卵から成魚まで一環した管理体制と、薬に頼らないストレスフリーな環境により育てられた優良な魚を「安全」「安心」でさらに「美味しさの探求」にこだわった魚として広く消費者に販売することを目的に設立された。また、クロマグロ、マダイ、ヒラメ、シマアジ、ブリ、カンパチなどの優れた養殖用種苗および20種以上の成魚、加工品を販売している。加工品には近大クエ鍋セット、近大キャビア、近大マダイ鯛めしの素、「近大マグロ」の中骨だしを利用したカップ麺などがある。従業員は22人で2013年度の売上額は30億円に達した。

ちなみに、社名の「アーマリン近大」とはアルファベットの最初の文字であり、常に水産増養殖の分野で先頭を行く開拓者であるという決意と、安心・安全の頭文字である「ア」、海を意味する「マリン」、近畿大学の略称である「近大」を組み合わせたものである。当社のロゴマークを図1に示した。

「アーマリン近大」は期待される大学発ベンチャー企業として多くの表彰を受けた。受賞の一部を紹介すると、

たとえば、2006年2月には「完全養殖クロマグロ」が日経優秀製品・サービス賞優秀賞日経新聞賞、同年3月には「クロマグロの完全養殖の技術開発、販売」が社団法人日本ニュービジネス協議会連合会主催のニュービジネス大賞優秀賞、2008年6月には「産官学連携功労者表彰・科学技術政策担当大臣賞」、2014年9月には独立行政法人科学技術振興機構主催による「大学発ベンチャー表彰特別賞」などがある。

養殖魚専門料理店「近畿大学水産研究所」

数年前から養殖魚の普及と養殖産業のさらなる発展に貢献するため、近畿大学水産研究所で養殖した魚をアピールして販売するような店舗を出店してはとの考えが所内で浮上してきた。大学であることからアンテナショップとして養殖魚専門料理店を出店するに当たり、その内容や名称を付けるには文部科学省の認可を受ける必要があり、大学の収益事業として「居酒屋」では認可されないが「寿司屋」「日本料理店」は良いとなった。そこで、養殖魚専門料理店「近大卒の魚と紀州の恵み近大水産研究所」1号店を2013年4月26日に大阪梅田(図2)、次いで同年12月4日に2号店として東京銀座に開店した(図3)。近大マグロをはじめとする近畿大学水産研究所が60年にわたって開発した安心・安全、そして美味しい養殖魚を料理して、直接消費者に提供することにより、その魅力や意義、歴史を伝え、養殖魚の価値の向上を図り、消費者からの声を直接受けることにより、今後の養殖魚類の研究開発現場にフィードバックし次の研究に生かすことを目的とした。提供している魚類は近大マグロ以外にブリ、マダイ、ヒラメ、カンパチ、シマアジを主として、オニオコゼ、イサキ、マアナゴなどである。さらには近畿大学のオリジナル養殖魚として開発し



図1. アーマリン近大のロゴマーク



図2. 養殖魚専門料理「近畿大学水産研」大阪梅田店



図3. 養殖魚専門料理「近畿大学水産研所」東京銀座店

た交雑魚キンダイ（イシダイ♀×イシガキダイ♂）およびブリヒラ（ブリ♀×ヒラマサ♂）の提供も始めた。これら近大産の魚類と水産研究所が所在する和歌山県の郷土料理の「めはり寿司」や地酒をそろえた「紀州の恵み」を上記2店舗で味わうことができる。また、近畿大学の学生にとっては、自分達が開発した食器の制作やメニューの開発、さらには店頭での接客などの機会が、「実学教育」の場として有効に利用されている。本店の経営はアーマリン近大であるが、店舗運営などはサントリーグループの株式会社ダイナックが行っている。このように大学が研究の成果として生産したものを産官学が連携して、専門料理店で消費者に提供するケースは日本の大学では初の試みといえる。

近大マグロの量産化に向けて

クロマグロの生産量を増やすにはブリやマダイとは異なり、広大な養殖場、大規模な生簀および資本力が不可欠であり、近畿大学単独では大幅な増産に限界がある。そこで2010年に民間企業（豊田通商株式会社）とクロマグロ完全養殖事業で技術協力提携を結んだ。当初は近畿大学で生産したクロマグロ稚魚の中間育成事業から始まり、さらに提携関係が拡大し、2015年には人工孵化



図4. 近大マグロ認定のブランドマーク

稚魚育成施設が稼働し、マグロ完全養殖産業化への体制ができた。近畿大学（アーマリン近大）は全面的な技術支援をすることで、日本国内の養殖用種苗の増産を図り、5年後には日本のマグロ養殖種苗の約50%を補う約30万尾生産を目指す。一方、成魚出荷においては現在の年間2000尾（約80トン）から5年後には両者で約3倍の6000尾を目標としている。これらの生産技術工程で養成したマグロは「近大マグロ」ブランドの認定基準に合格したものととしてブランドマーク（図4）を策定して添付し、「近大マグロ」の拡販に利用している。

以上、アーマリン近大の取組みを簡単に述べてきた。今後養殖マグロのさらなる普及を進めるために「近大マグロ」だけでなく、マグロの養殖用種苗の販売先企業で育った「天空まぐろ」「媛マグロ」「ツナプリンセス」などにおいても増産できるように努力したい。さらには国内需要にとどまらず、積極的な海外輸出も視野に入れた展開をしていきたいと考えている。また、養殖魚専門料理店「近畿大学水産研究所」を通して、マグロだけでなく、すべての養殖魚に対してのイメージを刷新し、消費者の皆さんへの認知度向上に役立てたいと考える。そして、このような取組みが経営不振が続いている我が国の養殖産業の活性化につながれば幸いであり、将来に向けた「アーマリン近大」の果たす役割は大きいものであると認識している。

文 献

- 1) 原田輝雄：ブリの増殖に関する研究一特にいけす網養殖における餌料と成長との関係一、近畿大学水産研究所報告, 1, p. 1 (1966).
- 2) 熊井英水編：最新海産魚の養殖、湊文社, p. 2 (2000).
- 3) 家戸敬太郎ら：生物工学, 90, 258 (2012).